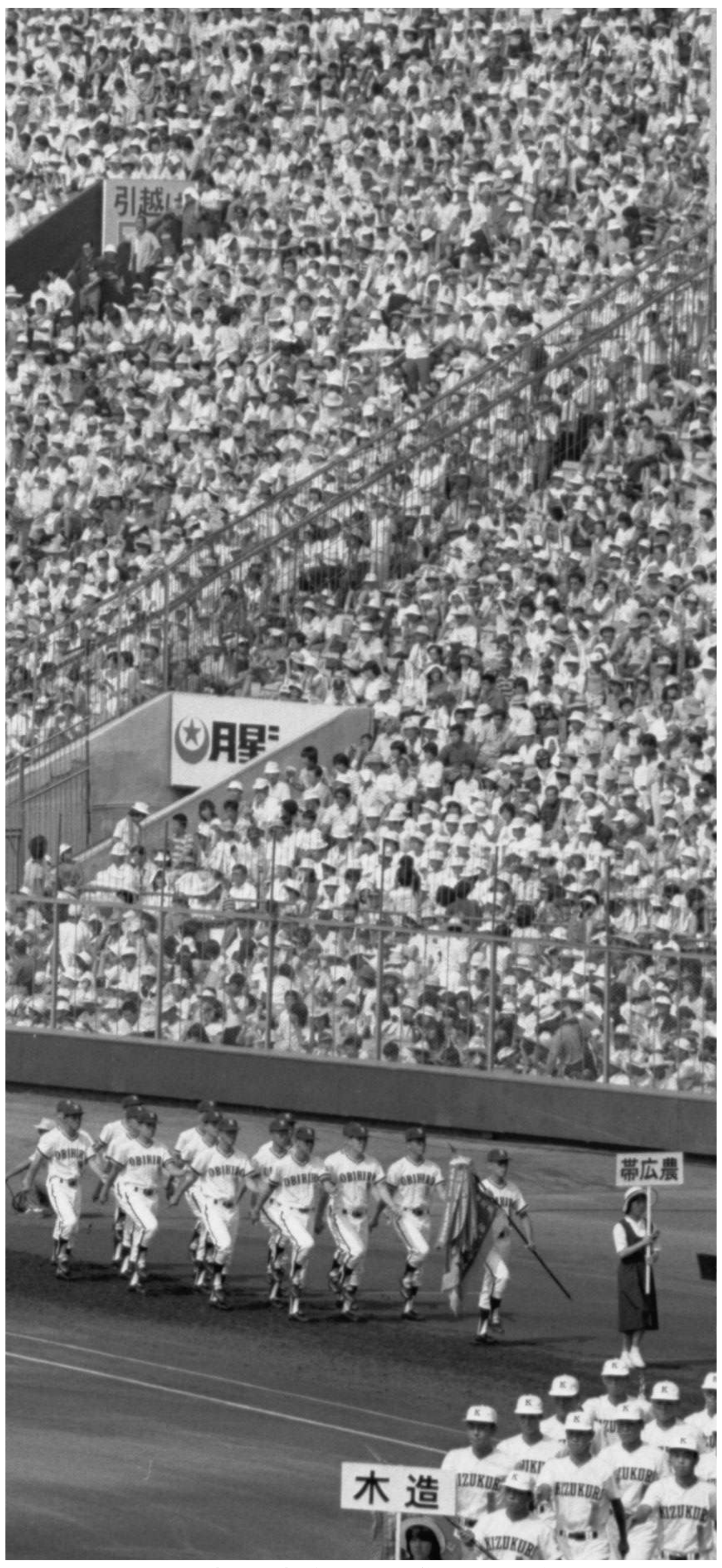
帯農健児 全国にその名

節目飾った「甲子園1勝」



初の甲子園大会の開会式で入場行進する、1982年のナイン

今夏の甲子園交流試合に出場した帯広農業高。高崎健大高崎高を破り聖地に1勝を刻んだ

今夏の甲子園交流試合で活躍したナイン

歴史に刻まれた一瞬だった。最終回2死、3ボール2ストライク。リリーフ水上流暢投手（3年）の97キロスローカーブに、相手打者のバットが空を切った。2020年8月16日午後2時42分、甲子園常連の強豪校を破る歴史的な初勝利。100周年を飾る最大のハイライトとなった。

喜怒哀楽のすべてが詰まった11カ月間だった。

昨秋、秋季道大会で強豪私立勢をなぎ倒し4強進出。甲子園の選抜大会21世紀枠候補校に選ばれ、1月に出場権をもぎ取った。

その直後。コロナ禍による選抜大会中止の衝撃が襲った。5月には夏の甲子園大会中止も決まり、目標を失った選手の中には引退を考える選手もいた。だが100年の節目の縁で結ばれたナインは、当時主将の井村塁選手（3年）を中心に再度まとまった。

そんなチームに吉報が届く。6月に入り道独自の大会、そして選抜出場校による甲子園交流試合開催だ。再び時が急ぎ足で動きだす。7月には甲子園の相手が強豪の高崎健康福祉大高崎（群馬）と決まり、前田康晴監督は入念に準備を進めた。

試合時間1時間50分。このために「帯農野球を100％発揮し甲子園に爪跡を残す」をキャッチフレーズに約1カ月間準備を重ねてきた。

相手投手は本調子ではなかったという。ただ北海道を代表する4割打線は甲子園でも通用する強打線だった。守備では痛烈な当たりを幾度もさばいた。いつ大反撃をしてくるか分からない相手強打線を井村、水上の2投手がスローボールで手玉にとるさまはテレビで多くの人が目に焼き付けたことだろう。

21世紀枠校が関東覇者を破る快挙。「やるべきことをしっかりすれば勝てることが分かった」。一見当たり前のように思える前田監督の言葉が深かった。

1923（大正12）年創部。70年に星栄監督が就任し隆盛の時代を迎え、82年には初めて甲子園大会に出場。道内農業高校の雄として今に続く。そして多くの先輩たちの礎の下、甲子園、そして母校の100年に記した勇姿は、次の世代へと語り継がれていく。

主将で流した涙

村瀬優さん（69）＝広尾町長

1970年、農業土木科卒業です。野球少年だったので、高校でも野球部に入りました。毎日練習に明け暮れ、精神力を鍛えられました。3番打者で守備はショート。高校3年生で主将になりました。高校最後の夏は十勝地区予選で1回戦負け。全校応援の中、涙を流したことを覚えています。

今年の夏、後輩たちが甲子園で強豪の健大高崎（群馬）に対して堂々と戦い、勝利しました。一丸となれば強い相手でも倒せることを示してくれた。感動しました。

当時は就職する考えで農業土木科に進学し、学校では特に規律を厳しく教わりました。社会に出てからを見据えた訓練でした。担任からは、技術系の職員を求めていた広尾町役場を勧められました。今の私があるのは担任のおかげです。歴史がある学校だけに、広尾町役場にもOBがたくさんいました。絆が強く、心細さはありませんでした。

100年の歴史があるのは本当にすごいことです。十勝といえば農業。数々の素晴らしい人たちを輩出し、十勝を下支えしている。誇りに思います。今後も多くの人材を生み出し、地域の産業に貢献する学校であってほしいです。

今年の甲子園出場を記念したボールを手に、野球部主将だった思い出などを振り返る村瀬広尾町長

往復24キロの自転車通学

山本幸平さん（35）

＝幕別出身、MTB東京五輪代表

農業土木科を2004年に卒業しました。特徴のある楽しい学校生活でした。自分は3年間クラス替えもなく、仲間、担任の先生とずっと一緒で、仲が良かったと記憶しています。

測量の授業は難しかったですが、建物やダム、橋を建設するために必要だと学びました。コンクリートも作りましたね。初めて学ぶことばかり。特色ある学校で、刺激的で飽きなかったです。

創立100年の歴史はすごいと思います。自分の代にはなかった食品科学科もでき、伝統だけでなく時代に合ったものも取り入れる進取性も持っていると感心しています。

マウンテンバイクは子どものころに始めました。高校では卓球部に所属していましたが、2年の夏に自転車一本に絞りました。3年生で初めて日の丸を背負い、世界選手権のジュニアクラスに出場できました。

幕別の実家から毎日往復24キロを自転車通学。十勝では当たり前かもしれませんが、体づくりの基本になった気がします。

冬季間も自転車に乗り、タイヤが滑る中でどうやって走ろうかと考えていました。今でも雨のレースに役立っていますよ。懐かしい思い出です。

来年の夏に延期された東京五輪日本代表の内定をもらい、今は拠点の長野で落ち着いてトレーニングできています。集大成の大会になるので、応援をよろしくお願いします。

ゴール後に観衆とハイタッチする山本選手。長年日本のトップに君臨する人気選手だ（2019年10月、東京五輪テスト大会）

「強さ」「らしさ」あふれる部活動

帯広農業高校では現在、スポーツと文化を合わせて23の部活動・同好会が活動している。インターハイ優勝経験を持つスポーツの強豪や特色を生かした活動など、生徒たちが放課後に練習を重ね心と技を鍛えている。主な部活動を訪問した。

道東で唯一、生徒が世話

馬術部

敷地南西端にある厩舎（きゅうしゃ）と馬場が部員たちの活動場所。今年は14人が所属し、サラブレッド3頭の世話をしながら技を磨いている。道内で馬術部を持つ高校は6校あるが、実際に馬を飼育しているのは馬産地の静内農業高校（日高管内新ひだか町）と帯農だけ。道東では唯一だ。

部員は早朝の餌やりや夜の水やりをしながら、馬の調整も行う。多くは高校から馬術を始めた生徒たちだが、人馬一体の生活の中で力を付けている。2001年には全国高校馬術連盟の大会で全国優勝を果たしたこともある。部長の高嶋桃花さん（3年）は「生き物の馬との生活や練習はハードなときもあるけど、部員一緒に取り組み、成果が出た喜びは何物にも代えがたい」と話す。

投てき筆頭に道内リード

陸上部

この20年余り、投てき種目を中心に道内高校陸上をリードしている。砲丸投げ、円盤投げ、三段跳びなどでインターハイ優勝や上位入賞の選手を数多く出してきた。

半年近く屋外での練習が制限される雪国の環境は、投てきには大きなハンデ。同部では西山修一監督の下、目標の設定、練習の工夫、メンタルトレーニングなどを意識的に行い、選手の自主性や意欲を高めてきた。その成果は道内外の指導者からも注目を集める。努力する上級生や活躍するOB、OGの姿に、後輩たちは刺激を受けている。部長の本多泰士さん（2年）は「練習は辛いときもあるけど成長を感じる。先輩方が築いた素晴らしい伝統を壊さないよう、責任持ってやりたい」と話している。

頂点を極めた公立の雄

柔道部

帯農高の武道場。空手道部と併用で半分に仕切られた畳の上で部員たちが乱取りに励み、日々汗を流している。道内有数の強豪校で、2012年の全国高校柔道選手権大会道大会では、男子団体で公立校として初となる優勝を達成。13年のインターハイ男子73キロ級では、山本悠司さん（現旭化成）が全国の頂点に立った。帯農勢として全国初制覇、道勢としても7人目の快挙だった。女子団体も19年の同選手権大会道大会で過去最高となる全道3位と力を付けている。

現在の部員は8人。主将の今西勇斗さん（2年）は「明るい雰囲気と強い団結が、代々続く帯農柔道部の特徴。全員で休まず練習して、部全体として一日一日、日ごとにレベルアップしていきたい」と力強く語る。

帯広農業高校の部活動・同好会

野球部
陸上競技部
柔道部
ソフトテニス部
バドミントン部
スケート部
空手道部
バレーボール部
バスケットボール部
サッカー部
山岳部
スキー部
馬術部
卓球部
剣道部
アイスホッケー部
新聞局
放送局
応援団
図書局
美術部
パソコン部
茶華道同好会